

校長室だより

共学共高

第

100

号

令和8年9月30日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

1年6組 大切！情報の授業

9月28日（月）1年6組の情報Ⅰの授業を参観した。O先生はチャイム前から教室に待機している。チャイム後に、あいさつとなり、「お願いします」と生徒たちから声が出る。O先生からは、「SNS、情報発信についてのトラブルを見ていきます。」と案内がある。スライドを映しながらの授業である。初めに、『『炎上』という言葉聞いて何が思い浮かぶか、話し合ってください。』と投げかけがある。生徒たちはペア又は3人で意見交換をする。指名された生徒たちが、「批判のコメントがたくさんつく」「SNS」「芸能人とか・・・」といった回答をする。その後、スライドには「批判のコメントが殺到する状況」と映し出される。O先生からは、「炎上すると、個人情報さらされたり、自宅や学校に来たり、といったことが起きています。」と説明がある。また、「炎上を引き起こしやすい発言や投稿には、犯罪・反道徳的な行為、無礼な発言、悪ふざけの動画などがあります。」と続く。その後、実際に起きた事例（寿司チェーン店での迷惑行為、テーマパークでの迷惑行為など）がいくつか紹介される。民事となると6700万円の損害賠償となる事例もある。2013年に起きたある事件では、負債総額が2億4千万円となり、いまだに当事者の写真もインターネット上に残り続けているという。

O先生は、こうしたデジタルタトゥーの特徴とリスクについて解説していく。具体的には、完全削除の困難さ、社会的影響、精神的負担などである。ヨーロッパでは「忘れられる権利」について、GDPR（EU一般データ保護規則）に明文化されていることが紹介される。O先生から次の投げかけである。「悪ふざけした人の名前や家族、写真などの個人情報を漏らす人についてどう思いますか。」生徒たちはすぐに話し合う。生徒からは、「いいことではないけれど、ダメとも言いづらい。」「やった人はもちろん悪いことをしたが、住所、家族などをさらすことは悪意がある。」「住所とか上げる必要はない。」「再発防止の歯止めにつながる面もあるが、ダメ。」といった発言がある。先生からは、「個人情報を上げると名誉棄損で訴えられることがある。アメリカでは性犯罪者の個人情報を公開している。そういう社会もある。」と説明がある。



その後、企業に就職を希望する学生のエントリーシートから本人の SNS を特定し、問題がないかどうか調査するという動画が紹介される。問題のある投稿をしている人が入社すると、その企業にとってのリスクとなり得るからこのようなビジネスニーズがあるのだろう。

さらに、さまざまなトラブル、ネットいじめ、悪質な書き込み、出会いにおけるトラブル、迷惑行為などについて考えていく。ある男性がスマホを一人で 50 台以上も所有し、女性のアカウントを持ち、児童ポルノ（写真保持）に該当するような犯罪を起こしている事例も紹介される。SNS などでも知り合った人を信用すると、だまされたり、犯罪に巻き込まれたりすることがある。また、個人情報や写真を渡さない。会いに行くのも慎重に。こうしたことが確認される。私有地や立ち入り禁止区域に侵入して写真を撮る、といった迷惑行為も現実にあるようだ。先生からは「写真を撮る場所を確認しましょう。」との投げかけがある。

結びに、生徒たちは各自で今日の授業内容の理解度を確認するサポートノートやアプリに取り組む。

今の生徒たちは生まれた時からデジタル機器が身近にある環境で育ってきて、それらを自然に使いこなせるデジタルネイティブである。さまざまなトラブルの当事者となることがないように、この授業での学びを活かしてほしいものである。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）